現代日本語におけるVテ副詞に関する研究
Vテから副詞への移行の観点から

现代日语Vテ副词研究

从Vテ向副词转类的观点出发

张玉玲 著

學苑出版社

現代日本語におけるVテ副詞に関する研究
Vテから副詞への移行の観点から

现代日语Vテ副词研究

从Vテ向副词转类的观点出发

安徽师范大学图书馆
藏书

张玉玲 著

學苑出版社

图书在版编目（CIP）数据

现代日语Vテ副词研究：从Vテ向副词转类的观点出发：日文／张玉玲著. —— 北京：学苑出版社，2016.3

ISBN 978－7－5077－4975－5

Ⅰ.①现… Ⅱ.①张… Ⅲ.①日语—副词—研究 Ⅳ.①H364.2

中国版本图书馆CIP数据核字（2016）第049909号

出 版 人：孟　白
责任编辑：杨　雷　李点点
封面设计：北京京点图文设计有限公司
出版发行：学苑出版社
社　　址：北京市丰台区南方庄2号院1号楼
邮政编码：100079
网　　址：www.book001.com
电子信箱：xueyuanpress@163.com
销售电话：010－67601101（营销部）、67603091（总编室）
经　　销：新华书店
印 刷 厂：北京京华虎彩印刷有限公司
开本尺寸：889×1194　1/32
字　　数：150千字
印　　张：6.75
版　　次：2016年3月第1版
印　　次：2016年3月第1次印刷
定　　价：45.00元

序

现代日语的副词种类繁多，且来源复杂，其中有一类是从动词的「～て」这个形态（第二活用形，以下简称“Vテ形”）转类而来的（以下称之为“Vテ副词”），但对于这类副词的认定，过去并没有客观而公认的标准，因此其外延无法确定，以至于日本出版的日语语文词典中收录的“Vテ副词”各不相同。显然这是日语语法学家对此缺乏系统的研究使然。

正因为如此，当张玉玲与我商量她的博士学位论文的选题时，我建议她做这个题目，而她也欣然答应了。客观地说，她最后写出来的博士论文比我预想的要好得多，令我感到喜出望外。张玉玲的博士论文即将付梓，她让我为之作序，作为昔日的导师义不容辞，权且写下以下文字。

就本书的研究方法和性质而言属于描写研究。充分地观察，充分地描写，充分地解释，这是乔姆斯基所主张的，语言学家们大多深以为然，我本人也一直将其作为自己努力的目标。本书在对日语“Vテ副词”的特征及其意义用法的观察和描写方面，做得是比较充分到位的，而她的解释也是比较合理而有说服力的，因此可以说，这个研究是比较成功的。

首先，作为研究的前提，必须确定其研究对象，就本书而言，必须先要明确甄别“Vテ副词”的标准。本书将“是否具有修饰功能”“是否有格支配的能力”“语序是否相对自由”这 3 项设定为判断 Vテ形是否作为副词使用的标准。质而言之，这 3 项标准考察的就是 Vテ形是否已经丧失了动词的功能而获得了副词的功能，同时还要看 Vテ形的语义指向是否发生了变化。这些标准的确立，使得本书的研究具有了客观性和合理性。

根据上述3条标准，作者对从语料库检索到的实例进行了考察分析，确定了有73个动词的(V)テ形可以作副词(副词性修饰成分)使用。然而，可以作为副词(副词性修饰成分)使用并不等于该Vテ形已经转类为副词。为了测定Vテ形的副词化的程度，作者设定了“副词度”这一概念，具体而言是通过统计该Vテ形作为副词使用的频率和考察该Vテ形的语义是否已经发生变化来加以认定。作者认为，副词度(即作为副词使用的频率)在50%以上的Vテ形可以认定为副词，不足50%者则视之为Vテ形的临时用法，这种动态的把握方式意味着承认许多Vテ形尚处于由动词的形态向副词转类的过程之中，存在着由量变到质变的过程。

而且，作者还对可以用作副词(副词性修饰成分)的73个动词的(V)テ形的语义类型进行了考察，即它们是作为哪类副词使用的，其中涉及情状副词、程度副词、时间副词和语气副词。同时，还考察了与不同语义类型的Vテ副词相对应的谓语动词的语义特征。这就使得其研究立体化了。

作者并未止步于此，还对Vテ形用作副词(副词性修饰成分)所必备的条件进行了细致的描写，书中指出，他动词的(V)テ形作副词(副词性修饰成分)使用时必须同时具备两个条件：语义的变化和修饰成分的消失；自动词则分为两种情况——有界动词需同时具备两个条件：语义的变化和修饰成分的消失(与他动词相同)；而无界动词只需具备赋予动作特定量的成分的消失这一个条件即可转类为“Vテ副词”。

总之，书中有许多可圈可点之处，明眼人不难看出。作者为本书的研究和写作付出了辛勤的劳动，一定也从中学到了不少东西，而且是终身受用的。

应该说，本书的出版对日语副词的研究是一个重要的补充，是可喜可贺的事情。但作为作者而言，取得博士学位和出版专著只是学者

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

人生的一个起点，而远非终点。仅就本书所研究的课题而言，也还有进一步发掘的余地。例如既可以从历时的角度进一步考察Vテ形副词化的过程，也可以与汉语动词的副词化进行对比研究，还可以扩展到动词连用形的研究。

张玉玲在学问上是有追求的，是肯付出的，相信她在今后的研究中会不断取得新的成就。

是为序。

彭广陆

2016年2月27日于京西寓所牛步居

前　言

现代日语副词包括固有的副词和由其他词类转变而来的两大类，本书以从动词的第二连用形[1]——Vテ转类而来的副词为对象，考察分析这类副词的特征，描写其用法。在此需要特别说明的是，从正文部分的副词度的分析得知，考察对象的73个动词的第二连用形并非都已转类为副词，有些只是临时具有副词（副词性修饰成分）的用法。本书题目虽为Vテ副词研究，但考虑到Vテ向副词的演变是动态的、连续的过程，有些虽尚未完全转变为副词，但只要可以作为副词（副词性修饰成分）使用的Vテ，均在本书的考察范围之内，且本书为统一称呼，均称之为“Vテ副词”。

以往对动词转类而来的副词的研究基本上仅限于例举而已，无人进行过系统的研究。另外，词类转变的过程是动态的、不断发展变化的，现代日语中有哪些动词的第二连用形已经转类为副词，哪些还处于转类的过程之中，学者们的意见并不统一。

本书的考察包括如下内容：

首先，确定甄别“Vテ副词”的标准和计算副词度。由于没有现成的标准可以参照，所以确定客观的标准是本研究的前提。通过对动词的第二连用形和副词本身特征的深入考察，本书将“是否具有修饰功能”“是否有格支配的能力”“语序是否相对自由”设定为判断“Vテ副词”的标准。并根据这3条标准，对从语料库检索到的实例进行考察分析，确定了有73个动词的第二连用形可以作副词（副词性修饰成分）使用。但这3条标准并不足以证明这73个动词的第二连用形已

---

①铃木（1972）将动词的连用形称之为第一连用形，动词的“て（で）”结尾的形式称之为第二连用形。

经向副词转变，因此需要精算副词度。所谓副词度，简而言之，是指副词化的程度。有的Vテ已经转类为副词，有的刚刚开始向副词转变，因此它们的副词度不尽相同。副词度的计算从使用频率和语义是否有变化两方面进行，通过精确的数学计算，得出73个副词的副词度。副词度在50%以上的动词第二连用形可以认定为副词，副词度在50%以下的动词连用形虽具有副词用法，但这类连用形的副词用法是不固定的、临时性的。

其次，考察73个动词的第二连用形在作为副词（副词性修饰成分）使用情况下的语义分类。具体包括情状副词、程度副词、语气副词和时间副词。另外，根据这类副词的语义分类，考察了与其相对应的谓语动词的特征。

再次，明确动词的第二连用形作为副词（副词性修饰成分）使用的条件。与现代日语中的固有的副词不同，本书考察的副词属于副词中的特殊类。通过考察得知，并非所有的动词的连用形都能作为副词（副词性修饰成分）使用。他动词需同时具备两个条件：语义的变化和修饰成分的消失；自动词分为两种情况，即有界动词需同时具备两个条件：语义的变化和修饰成分的消失；而无界动词只需具备特定量的消失这一个条件即可转类为“Vテ副词”。

最后，本书尚未解决的问题如下：第一是本书以共时研究为主，历时研究尚不成体系，今后将以历时研究为中心继续考察。第二是今后将对语义的变化作具体分析。第三是不仅限于日语，其他语言中也存在动词转类为副词的现象，今后将做这方面的对比研究。

本书在论述过程中采用定性分析与定量分析相结合的研究方法，搞清了“Vテ副词”的基本特征及其分布情况，对动词向副词的转类的研究是一个重要补充，在一定程度上弥补了前人研究的不足。

目　録

第1章　序　章 …… (1)
1.1　本研究の対象およびその位置づけ …… (1)
1.2　本研究の可能性 …… (5)
1.3　Vテが副詞(副詞的修飾成分)として機能する場合の先行研究 …… (7)
1.3.1　成田(1983:137～158)の考察 …… (7)
1.3.2　南(1993:79～85)の考察 …… (8)
1.3.3　仁田(1995:87～126)の考察 …… (9)
1.3.4　三宅(1995:441～450) …… (10)
1.3.5　原沢(2001:35～37) …… (12)
1.3.6　吉永(2008:32～35) …… (14)
1.3.7　先行研究の問題点及びあいまいな副詞化連続論 …… (15)
1.4　本研究の目的 …… (18)
1.5　本研究の構成 …… (20)

第2章　Vテ及び副詞への移行にかかわる要素 …… (22)
2.1　Vテの機能 …… (22)
2.1.1　Vテの語誌 …… (22)
2.1.2　Vテの接続機能 …… (23)
2.1.2.1　森田(1980:313) …… (23)
2.1.2.2　言語学研究会・構文論グループ(1989:11～47) …… (24)
2.1.2.3　南(1993:78～86) …… (25)
2.1.2.4　仁田(1995:88～126) …… (26)

2.1.2.5　吉永(2008:5～7) …… (26)
2.2　副　詞 …… (28)
2.2.1　副詞についての再認識 …… (28)
2.2.1.1　大槻(1897) …… (28)
2.2.1.2　山田(1908) …… (28)
2.2.1.3　松下(1928) …… (29)
2.2.1.4　時枝(1950) …… (29)
2.2.1.5　千野(1984) …… (29)
2.2.1.6　『日本文法大辞典』(副詞の項目) …… (29)
2.2.1.7　『国語学研究事典』(副詞の項目) …… (30)
2.2.1.8　『日本語学研究事典』(副詞の項目) …… (30)
2.2.1.9　『国語学大辞典』(副詞の項目) …… (31)
2.2.2　Vテから副詞への移行にかかわる要素 …… (31)

第3章　「Vテ副詞」への移行 …… (36)
3.1　「Vテ副詞」の用法への判断基準 …… (36)
3.1.1　修飾機能の獲得 …… (36)
3.1.2　格支配の喪失 …… (41)
3.1.3　語順の相対的な自由化 …… (49)
3.1.4　副詞(副詞的修飾成分)の使い方を持つVテ …… (53)
3.2　Vテの副詞度の算出 …… (60)
3.2.1　副詞(副詞的修飾成分)としての使用頻度 …… (61)
3.2.1.1　使用頻度の統計 …… (61)
3.2.1.2　使用頻度の算出における補足説明 …… (65)
3.2.2　意味の変化 …… (67)
3.3　結果の分析—Vテの副詞度 …… (70)
3.4　副詞度と辞書副詞の認定状況 …… (75)

第4章 「Vテ副詞」の意味分類 …… (81)
4.1 先行研究の副詞の分類 …… (81)
4.1.1 山田孝雄による副詞の意味分類 …… (81)
4.1.2 山田以降の副詞の意味的分類 …… (82)
4.1.2.1 岩崎(1911) …… (82)
4.1.2.2 芳賀(1913) …… (82)
4.1.2.3 金田一(1931) …… (82)
4.1.2.4 橋本(1937) …… (83)
4.1.2.5 松尾(1936) …… (83)
4.1.2.6 渡辺(1971) …… (83)
4.1.2.7 北原(1981) …… (83)
4.1.2.8 中右(1980) …… (84)
4.1.2.9 益岡・田窪(1992) …… (84)
4.1.2.10 仁田(2002) …… (84)
4.2 Vテの様態副詞 …… (85)
4.2.1 主体の動き様態を表す副詞 …… (85)
4.2.1.1 主体の移動の様態 …… (85)
4.2.1.2 主体が動作を行う状態 …… (86)
4.2.2 主体の様子を表す副詞 …… (88)
4.2.2.1 主体の姿勢を表すもの …… (88)
4.2.2.2 人の顔の様子を表すもの …… (89)
4.2.3 主体の心理を表す副詞 …… (89)
4.2.4 主体の意志態度を表す副詞 …… (91)
4.2.5 複数の主体の様子を表す副詞 …… (92)
4.3 Vテの程度副詞 …… (93)
4.3.1 程度を表すもの …… (94)
4.3.2 量を表すもの …… (95)

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

4.3.3　頻度を表すもの ……（95）
4.3.4　比較を表すもの ……（95）
4.4　Vテの陳述副詞 ……（96）
4.4.1　否定と共起する副詞 ……（96）
4.4.2　肯定と共起する副詞 ……（97）
4.4.3　疑問と共起する副詞 ……（97）
4.4.4　主体の予想と真逆であることを表す副詞 ……（98）
4.5　Vテの時の副詞 ……（98）
4.6　「Vテ副詞」の意味上の全体像 ……（100）
4.6.1　意味分布の概観 ……（100）
4.6.2　結果副詞が見られないこと ……（101）

第5章　「V1テ副詞」の意味別に対応しているV2 ……（107）
5.1　先行研究に基づく動詞の分類 ……（107）
5.2　V1テの意味別に対応しているV2のタイプ ……（110）
5.2.1　主体の動き様態を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（110）
5.2.1.1　主体の移動の様態を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（111）
5.2.1.2　主体が動作を行う状態の副詞と組み合わせになるV2 ……（112）
5.2.2　主体の様子を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（113）
5.2.3　主体の心理を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（115）
5.2.4　主体の意志態度を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（118）
5.2.5　複数の主体の様子を表す副詞と組み合わせになるV2 ……（122）
5.2.6　程度副詞と組み合わせになるV2 ……（124）
5.2.7　時の副詞と組み合わせになるV2 ……（126）

第6章　「Vテ副詞」の成立条件 …… (129)
6.1　限界性に基づく動詞分類 …… (132)
6.2　具体的な考察 …… (135)
6.2.1　主体動作・客体変化動詞＜他動詞＞ …… (135)
6.2.2　主体変化動詞＜自動詞＞ …… (137)
6.2.3　主体動作動詞＜他動詞/自動詞＞…… (140)
6.2.4　内的情態動詞＜他動詞/自動詞＞…… (143)
6.3　副詞の「程度性」に基づく制約 …… (148)
6.3.1　「立って行く/立って歩く」類 …… (152)
6.3.2　「座って電話を切る」類 …… (154)

第7章　「V1テ副詞＋V2」にかかわる周辺的な問題 …… (156)
7.1　述語を修飾する「Vテ副詞」の順序 …… (156)
7.1.1　「主体の面部の様子を表す副詞」が先にくる場合 … (156)
7.1.2　「主体の姿勢を表す副詞」が先にくる場合 …… (157)
7.1.3　「主体の心理を表す副詞」が先にくる場合 …… (158)
7.1.4　「時の副詞」が先にくる場合 …… (160)
7.2　「V1テ＋V2」の否定の焦点 …… (161)
7.2.1　テ形の否定の焦点の先行研究 …… (161)
7.2.2　V1テに置かれる否定のスコープ …… (165)
7.2.2.1　移動の様態を表す副詞 …… (165)
7.2.2.2　主体の心理状態を表す副詞…… (165)
7.2.2.3　主体が動作を行う状態を表す副詞 …… (166)
7.2.2.4　時の副詞 …… (167)
7.2.3　V2に置かれる否定のスコープ …… (167)
7.2.3.1　姿勢を表す副詞 …… (167)
7.2.3.2　人の顔の様子を表す副詞 …… (168)

7.2.3.3　主体の心理状態を表す副詞……（169）
7.2.3.4　主体の意志態度を表す副詞……（170）
7.2.3.5　複数の主体の様子を表す副詞……（171）
7.2.4　「V1テ＋V2」の全体に置かれる否定のスコープ……（172）
7.2.4.1　人の顔の様子を表す副詞　……（172）
7.2.4.2　主体の意志態度を表す副詞……（173）

第8章　異なる文体の調査—朝日新聞を対象に　……（176）
8.1　「Vテ副詞」の量的な統計　……（176）
8.2　「Vテ副詞」の意味分類　……（181）
8.3　Vテの副詞度　……（183）
8.4　新聞での「Vテ副詞」の特徴　……（186）
8.4.1　量的な特徴　……（186）
8.4.2　意味分類の特徴　……（186）
8.4.3　副詞度の特徴　……（186）
8.4.4　V1テと組み合わせになるV2の特徴　……（187）

第9章　終　章　……（188）
9.1　結　論　……（188）
9.2　本研究の意義　……（192）
9.3　今後の課題と展望　……（194）

参考文献　……（195）

謝　辞　……（201）

第1章　序　章

1.1　本研究の対象およびその位置づけ

動詞のテの機能については、いままで様々な研究がなされてきた。従来の辞書での認定および関連の研究論文によれば、動詞のテの機能は主として継起、原因・理由、手段、状態などの意味を表すとされ、それと同時に、対等・並列、条件と反復の使い方も見られる。仁田(1995)によれば、テ形接続の意味・用法がこのように広範で多岐にわたるのは、テ形が、「シナガラ」ヤ「ノデ」ヤ「シ」などに比べ、接続形式としてさほど明確な固有の意義を有していないことに起因しているという。

本研究の取り上げるテ形は、形の上では、動詞のテ形(以下はVテ①と称する)と同じであるが、述語としてのそれではなく、副詞②として述語を修飾するのに使われる場合に限る。述語として機能する場合と副詞の修飾成分として機能する場合の相違を次の用例③で示す。

---

①本研究でのVテは、文脈によって、動詞の連用形を指す場合もあれば、副詞としてのVテを指す場合もある。また、副詞としてのVテを指す場合、主節の動詞との組み合わせを考察する場合、弁別するため、V1テと記し、主節の動詞はV2と記す。

②第3章の副詞度の考察から分かるが、一部分のVテは副詞の用法を持っているが、副詞と称されるのは程遠いものである。ところが、動詞から副詞への移行は連続体であり、副詞ではないが、ただ副詞の使い方を持っているものはすべて本研究の範囲に入る。

③例文は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』モニター公開データ(2009年度版)(以下BCCWJと表記)によるものもあれば、NLB(URL: http://nlb.ninjal.ac.jp/)コーパスによるものもある。

＜テ形が述語として機能する場合＞

(1)当時の私はまだ若くて、アイデアだって何だって湧き出る泉の如くって感じだったけれど、それでも、これだけ書いて、これだけ売ってしまうと、いつ枯れてしまうだろうかと不安にもなってくる。(耽美小説の書き方)

(2)こんなところで商売をしてもろくなことにはならないと、久四郎はしかたなくその家を売って、よそへひっこしたという。(てんぐの人さらい)

＜テ形が副詞として機能する場合＞

(3)思い切って打ち明ける。(広辞苑第六版)

(4)夜になると決って熱を出す。(広辞苑第六版)

(1)(2)とは異なり、(3)(4)はいずれも主体の状態のありように言及することによって、事態の実現のされ方を限定し特徴づけているものである。日本語学では、「連用修飾」という用語が一般的であるが、構文成分としては副詞の修飾成分とも呼ばれる①。そして、(3)(4)から分かるように、テ形が副詞として機能する場合、動詞の連用形から副詞へ移行してしまい、それに伴って、動詞の陳述性の喪失②が起こっていると思われる。

ところが、Vテから副詞への移行に関して、新川(1996)が「動詞から副詞に移行しはじめている、あるいは移行している」と述べてい

---

①仁田ほか(2000)『文の骨格』を参照。

②高橋(1994)に動詞の述語の喪失について次のような指摘がある。「時雄は……胸にいらいらする思いをたたみながら黙して歩いた。」(田山花袋「蒲団」)、「長いあいだ、やみに坐して、日光を見なかったためであろう。」(菊池寛「恩讐の彼方に」)「黙して」と「坐して」のような単語は、いつも中止形で使われ、現代語では、ふつう「黙しろ」「坐そう」のような終止形にならない。もとは完全な動詞であったが、この機能の頻繁な使用が動機となり動詞ばなれをおこしたのである。これは動詞の述語性の喪失と称される。

るように、品詞としての副詞であるのか、副詞ではないのか、はっきりした線が引けないということが問題となってくる。この点について、以下の具体例がある。

(5)a. フリードマンは足首を重ねて坐り、組んだ手を膝の上に置いた。(審判)<動詞の連用形>

b.「女であることを後悔されているのですか」彼女の疑問にはとりあわずに、男は重ねて尋ねる。(ライオンハート)<副詞>

(6)a. 蓮月の言葉を繰り返して鉄斎は改めてその空地をみた。(夜明け前の女たち)<動詞の連用形>

b. 繰り返して言うが、愛する人を亡くした人にとっては、亡き人は、いつまでも、その心に棲みついているのである。(花明かりのことば)<副詞>

例(5)、(6)ように、同じ動詞でありながら、そのテ形が動詞の連用形になったり、副詞になったりする。本研究はどのような場合にVテが副詞として機能するかを究明することを一つの目標とするものである。

本研究では同時に存在する複数の事態を表す動詞を、それぞれV1、V2と呼び、V1とV2によって表される複数の事態において、第一動詞(V1テ)が第二動詞(V2)の動作・行為・できごとの行われ方を限定する、あるいは特徴づける働きをしているものに限って考察を行うこととする。言い換えれば、本来Vテによって表される第一動詞とその後ろに続く第二動詞の意味関係は並列、対比、継起など様々な用法があり、これらは、V1テとV2それぞれが事態を述べる陳述性を持つものであるが、本研究の対象となる修飾性をもつV1テは、動詞の陳述性を失い、第二動詞V2を修飾する働きをする類のものである。つまり、本研究の取り上げているテ形は、形の上では、Vテ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com